

人

集まる

モノ

集める

記録・記憶
と
文書館資料

➡ 23

「佐波山洞道掘削事業一件」（県庁戦前A土木30～38、43・44）

記録・記憶 ⑧

記録を集める～近代山口県の土木事業～

《トンネルを掘った記録》

山口市と防府市の境界に位置する国道262号佐波山（鯖山）トンネル。山口方面の上り線トンネルは、明治20年（1887）に竣工した隧道を拡幅したものです（トンネルは「隧道」「洞道」とも呼ばれていました）。全長515.8m、明治期の道路隧道としては国内で三番目に長いものでした。

工事を指揮したのは植木平之丞（萩出身）。工部大学校土木工学科卒業と同時に山口県に着任、萩・明木間の鹿背隧道（明治17年開通、国登録有形文化財）の設計にもあたった県土木技師です。植木は三井鉱山三池炭鉱の技師として、三池港の整備（国内唯一の閘門式港湾、明治41年竣工）にあたるなど近代日本を代表する土木技師としてその名をとどめています。

当館には、佐波山トンネルの工事内容の詳細に関する複数の記録が残されています。それによると、掘削のベースとなったのは伝統的な鉱山技術でした。坑道や抗口を頑丈に巻きたてる石工の技術が重宝され、周防大島久賀の棟梁福田亀吉や

山口の鉱山経営者蔵重善兵衛配下の石工が腕を振ったのです（彼らは琵琶湖疏水の工事に携わっていました）。生産開始間もない小野田セメントも用いられました。

史料から、掘削にあたってダイナマイトや削岩機が用いられ、柏木幸助（三田尻の発明家）・藤岡市助（岩国出身の電気技術者）・田辺朔郎（琵琶湖疏水を設計した土木技術者）らの支援があったことがわかります。

この工事が、伝統技術に加えて近代的な技術が導入されたハイテクプロジェクトであったことを伝えてくれます。



▲大正期と思われる佐波山トンネル抗口（荒瀬家文書306-9）



絵はがき「関門海底トンネル」〈文書館図書726-58-181〉

鉄道による関門海峡連絡。明治以来、土木技術の粋を結集して、「架橋」「トンネル掘削」の両面からその速成がめざまされました。世界最初の海底鉄道トンネルとして完成したのは昭和17年（1942）。その記念絵はがきには、この隧道掘削を可能にしたシールド工法の概略を紹介したシートも含まれています。

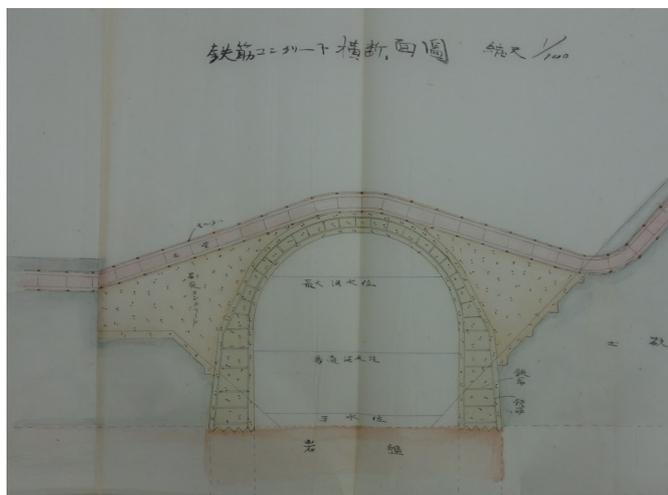
《水を集めた記録》

天候に大きく左右されるとは言え、水の安定的な確保こそが農作物の生産にとっての最重要課題でした。

明治32年（1899）の耕地整理法成立を機に、各地で耕地整理組合が結成されました。補助金が投入され、土地改良や大規模な灌漑が推し進められ、新たな農地が生み出されることになり、さらに、用水確保のために、溜池が築造され水路が張り巡らされていきます。

当館蔵の重要文化財山口県行政文書・戦前 A 農業の中に、県下各地の耕地整理組合の活動に関する数多くの簿冊があり、議事録や工事記録が集められています。

写真は「豊浦郡西市村台耕地整理組合」（県庁戦前 A 農業2021）に綴じ込まれた用水路工事に関する図面の一部です。高地にあった西市村台が原（現下関市）で実施された溜池や水路の築造に関する記録です。高台に溜池を整備して、高低差により水勢を生み出し、広いエリアに農業用水を行き渡らせようとするものでした。写真は川を横切る水路を支えたコンクリート製水路橋の断面図です。こうして運ばれた水が耕地を潤し、畑地が水田に切り替えられることになりました。



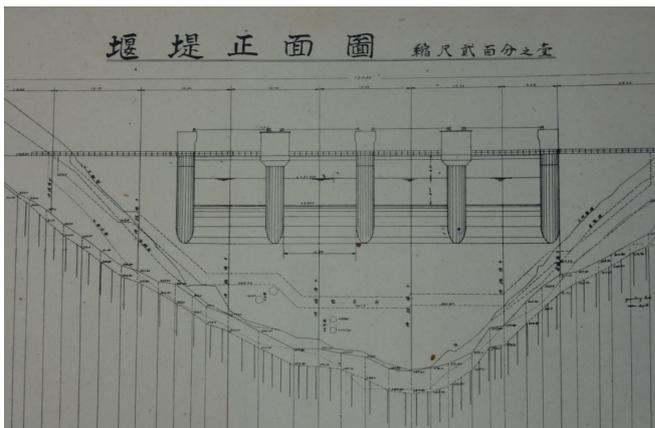
▲台が原サイホン断面図（大正6年築造）

《水を利用した記録》

昭和十年代、錦川・厚東川・木屋川などを舞台に河川総合開発事業が積極的に推進されました。アメリカのニューディール政策の影響を受けた恐慌対策事業の一面もありましたが、戸塚九一郎知事の下に利水調査委員会が組織され、ダム建設を中軸に、工業用水の確保、発電、治水などが企画されました。

その詳細は当館が所蔵する河川課・河水課・利水課・企画課作成の県庁文書に集積されています。文書記録のほかに、このプロジェクトを知る手がかりとして、写真や図面で構成された「錦川利水第一期工事写真帳」（山本家文書〈山口市〉11）もあります。

竣工時に作成された記念写真帳と文書記録とをあわせて読み解くことによって、大規模な建築工事や土木工事に取り込まれていた最先端の技術や関係者の熱誠、そして時代の雰囲気を読み取ることができます。



▲向道ダム（堰堤正面図と放水試験写真）



▲竣工式当日（昭和15年11月27日）の間上〈はざかみ〉発電所